教室で創られる〈古典〉―国語教育誌の中の〈古典〉―

井浪　真吾

一　はじめに

平成20年から改正の動きを見せていた新学習指導要領（平成21年版を以下このように呼ぶ）は、平成25年度に高等学校でも全面実施されることになる。これによって小中高全てにおいて新学習指導要領が全面実施されることとなる。

新学習指導要領国語編においては、「言語活動の充実」や高等学校での「科目構成の改善」など、幾つか改正のポイントが挙げられるであろうが、何よりも稿者の目を引くのは「言語事項」から「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」への変更やそれに関連した小学校での古典学習実施などに見られる一連の「伝統的な言語文化に関する指導の重視」である。これは言うまでもなく、改正された教育基本法を承けてのことであるが、古典テキストがこれまで以上に重要な役割を担わされることは言うまでもない。

こうした状況の中で、古典はどのようなテキストとして、どのように学習者の前に差し出されようとしているのか。新学習指導要領におけるそれについては、竹村信治氏が次のように的確にまとめている。

したがってその学習指導は、音読、暗唱、朗読を中心に、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取ったり、登場人物や作者の思いなどを想像したり、解説の文章によって昔の人のものの見方や考え方を知ったり、ことわざや慣用句、故事成語などを使ったり、古典の一節を指定して古典に関する文章を書いたり、内容や表現の特色を理解して読み味わったりさせ、最後にそれらを「我が国」の「伝統と文化」として称揚しておけば済むのだから、議論するまでもないことだ。そこでは、学習者がそれを楽しく感じてねばり強く取り組むようにするためのコミュニケーション、パフォーマンスが「指導の工夫」ということになる。[*1]（傍線、引用者。以下同）

つまり、音読、暗唱、朗読を中心として、古典テキストに関わる文章を書かせるなどの学習活動を通じて、「称揚」すべき古典テキストに語られる古人の精神性や古人の眼差し、古人の精神性が具現化されているとみなされる古人の表現を、強固に内面化、身体化させることが第一に目論まれていると看取できるのである。確かに新学習指導要領の求めるところは明らかで「議論するまでもない」。「しかし」と竹村氏は次のように続ける。

しかし、にもかかわらず議論の必要が感じられるのは、そうした学習指導、すなわちカノン化された「伝統的な言語文化」の鑑賞主義的で活動本位の、知的刺激の欠如した扱い方が学習者と「古典」との間に横たわる距離を拡大してきたことを、我々が知っているからだろう。[*2]

これと関連したものとして、西辻正副氏による平成17年度に実施された「教育課程実施状況調査」の際の生徒質問紙調査結果のまとめが挙げられる。

生徒質問紙調査をみると、「古文は好きだ」、「漢文は好きだ」に「そう思わない」又は「どちらかといえばそう思わない」と否定的な回答をした生徒は依然として多い（今回調査では、古文72・6％、漢文71・2％。前回調査では、古文74・8％、漢文70・5％）。

これは「学習者と「古典」との間に横たわる距離を拡大してきた」と述べる竹村氏の発言を裏付けている。この調査は新学習指導要領に改正される前の調査であるが、新学習指導要領以前の学習指導要領が求める古典観、学習者への古典の差し出し方に大きな変更点はない。西辻氏は「指導の改善が求められる」と述べるが、新学習指導要領の求める古典観、古典の差し出し方がその一要因となっているのは言うまでもない。

それ故、「伝統的な言語文化に関する指導の重視」が告示されてから、国語教育雑誌でも「古典復活！」[*3]、「伝統的言語文化に親しむ」[*4]、「古典で身に付けさせたい国語学力」[*5]と特集が組まれ、様々な研究論文が発表されたり、実践が報告されたりと、好意的な視線、批判的な視線交々に議論が続けられている。

それでは、新学習指導要領が一定の古典観、学習者への古典の差し出し方を求める中で、初等教育・中等教育関係者は古典をどのようなテキストとして捉え、学習者にどのように古典テキストを差し出そうとしているのか。その結果、学習者にどのような古典像を与えようとしているのか、または与えてしまうのか。このことを、学習指導要領改正の動きが始まった二〇〇八年以降の国語教育誌に発表される実践報告や研究論文等から探っていく。そして、古典をめぐる〈可能性の空間〉（P・ブルデュー）を探る一助としたい。

なお、国語教育誌として、初等教育・中等教育現場での実践者が手に取りやすい商業誌の「教育科学国語教育」、「実践国語研究」（以上、明治図書）、「月刊国語教育」（とうほう、二〇一一年三月休刊）、多くの初等教育・中等教育関係者が目にする学会誌「月刊国語教育研究」（日本国語教育学会）、「国語科教育」（全国大学国語教育学会）を中心に、幾つかの商業誌や学会誌[*6]を対象とした。

二　カノンとしての古典

古典学習材の開発を論じる中で、渡辺春美氏は戦後、古典テキストがどのように捉えられてきたかについて簡潔にまとめている。少々長くなるが引用する。

戦後における古典学習材に関する論は、①古典を時代を超えて読み継がれ、文化伝統に関わる規範的なものとする古典観に立つものを中心としながらも、②古典を各時代において多くの人に受容されたものとする古典観に拠るもの、③民衆の口承文芸、説話などに重点を置いた古典観に基づくものがあった。また、これらの論のいずれもが古典に何らかの価値を先験的に認めるのに対し、④読み手が古典に主体的に関わり、価値を創造的にとらえ、意義を見出すとき古典は初めて古典となるとする「関係概念としての古典観」に拠るものがある。これは、読者論とも相俟って、一九八〇年代から次第に浸透していったと思われる。[*7]

渡辺氏は学習材と古典観との関係という観点から、戦後の国語教育界に見られた古典観を四点述べているが、渡辺氏が別のところでまとめている通り、これらは二つに大別できる。すなわち、「古典を先験的に価値あるもの」とする捉え方と、「古典の価値は先験的にあるのではなく、

学習者との関係の中に立ち上がり、見いだされるとする」[*8]捉え方である。前者の捉え方は「古典には歴史を超えた価値があり、古典自体に歴史を超える価値があるからこそ、今でも読み継がれているのである」[*9]、「古典とは、時間によって選び抜かれ評価され続け、現在も価値を認められている和漢の作品」[*10]、「古典は様々な時代の評価に耐え続けてきた。また、長い時代の波に洗われ、練られて今の形に磨かれてきた」[*11]などの発言を挙げれば、そのことは実感されよう。要するに「古典」という名の通り、長い時代を耐えてきた価値あるテキスト、或いは価値がある故に長い時代を経て残ってきたテキストと目されているのである。

しかし言うまでもなく、ハルオ・シラネらが明らかにしたように[*12]、現在、古典と呼ばれているテキスト群は、各時代において様々な用途の下に価値付与されただけであって、テキストそのものに先験的に価値が内在しているのではない。このハルオ・シラネが指摘するカノン化の過程を踏まえる論者も見られるが[*13]、圧倒的に数が少ない。渡辺氏の指摘する通り[*14]、「カノンとしての古典」言説は根強くはびこる言説なのである。ただ一方で、「カノンとしての古典」のどのような側面に価値を置くかは論者や報告者によって異なる。以下、この点について詳しく見ていく。

A　美しい響きやリズムを持つ古典

国語教育誌の中で圧倒的に多く見られるのは、音読・暗唱・朗読を中心とした学習活動を展開する実践報告や研究論文である。それらの幾つかから古典テキストの捉え方を窺ってみたい。

小学校の古典教育は、国語の美しい響きや語調、独特のリズムを感じ取りながら音読、暗唱、群読する国語学力を育てるためである。[*15]

○美文のリズムの美しさ

平家物語などの美文にふれる。これは暗唱させるとよい。（中略：引用者）

これまでは書かれていること（引用者注：『枕草子』「春はあけぼの」段）の面白さに気づかせていた。さらに、古典のもう一つの醍醐味であるリズムの楽しさ、文の美しさに触れる。[*16]

古典の優れた表現やリズムを読み味わうことで、日本文化の中に息づいている美意識や価値観に触れさせる。そして、自分自身や現代社会を見つめ直す。そのために、音読や暗唱を重視した。[*17]

一見すると分かるように、古典は「美しく」、「優れた」表現をもつテキストとして捉えられている。古典テキストに内在していると言われる「美しい響き」や「独特のリズム」とは、和歌や俳句、『平家物語』冒頭や『方丈記』冒頭等で言及される「七五調のリズム」が前提として語られている[*18]。それらを音読や暗唱を通じて、学習者が内面化したり身体化したりすることを目的とした実践報告や研究論文が幾つも見られるのである。

美しい響きや語調、特有のリズムを持つ古典、美文としての古典が音読や暗唱によって身体化・内面化される。その際、その古典テキストに付与されてきた歴史性や、テキストの書き手の思想などは一切考慮に入れられない。それ故、古典テキストの書き手の思想や古典テキストに付与されてきた価値が、学習者の思いや考えとは別に良きものとして再生産されることになるのである。

B　日本民族の核心を持つ古典

また、次のような古典テキストの捉え方も散見される。代表的なもの

を挙げてみよう。

時代を超えて現代に生き続けている古典には、日本民族としての生き方、考え方があらわされている。古典を通して日本人の人間性を形成している要因をさぐり、（後略：引用者）[19]

「国際化」の時代であればこそ自国の伝統文化を大切にし、日本人としてのアイデンティティを育てなければならない。[20]

民族の核心ともいうべき日本の神話を後世へ語り継いでいくための学習システムを提案する。[21]

これらの発言には、古典テキストには「日本民族の核心（生き方、考え方）」が書き込まれていると捉えられ、それ故、古典学習を通じて、「日本人の人間性を形成している要因をさぐり」、「日本人としてのアイデンティティ」を確立することが目指されていることが窺えるのである。これらの発言からはナショナリスティックな側面に加えて、中教審答申（平成20年1月）中の「世界に貢献するものとして自らの国や郷土の伝統や文化についての理解を深め、尊重する態度を身に付けてこそ、グローバル化社会の中で、自分とは異なる文化や歴史に敬意を払い、これらに立脚する人々と共存することができる」を踏まえたものとして捉えられる。[22]「自分とは異なる文化や歴史に敬意を払」うことを目的として新学習指導要領は「伝統文化尊重」を求めるのだが、新学習指導要領以前のナショナリスティックな言説と親和し、その側面が強調されてしまっているのである。すなわち日本人の日本人たる所以が書き込まれたテキストが古典テキストだという捉え方なのである。

C、現代に通じる普遍的な考え方が内在された古典

次に挙げる古典テキストの捉え方は、一見するとカノン化しているようには見えないが、古典テキストを仰ぐべき対象としていることがよく分かる。

（引用者注：中学）三年生では漢文学習の総まとめとして、「漢文訓読のきまりを理解させ、音読を通じて漢文特有の言い回しに慣れさせる」「二千五百年前に生きた孔子の考えを読み取り、現代の生き方にも共通する真理に気づかせ、人間の生き方について考えを深めさせる」の二点を重点に「論語」の指導をした。[23]

『徒然草』は、筆者・兼好の鋭い観察眼や考察力による人の世の真理（無常観）をついた随筆である。中でも名人譚は、身分や家柄にとらわれず、ある特定の分野において秀でた能力を発揮している人物の生き方や感じ方・考え方について、エピソードを通して紹介しており、それらのエピソードから現代にも通じる普遍的な思想や価値観を読み取ることができる。[24]

こういう時代（引用者注：観念的教養論より国際的実力養成論が勝った時代）の小学校の古典学習であるからこそ、リズミカルな音読で古文に親しませる指導がよい。小学生が音読で耳から記憶した古典の名句名言は、必ず身についた教養としての判断の役に立つ。[25]

神話や昔話の読み聞かせは、日本の伝統文化を伝えると共に、そこに内包される民族の智恵を子ども達に継承する役割を担っている。[26]

これらに見られるのは、古典テキストには「現代にも通じる普遍的な思

想や価値観」、「教養」「真理」が内包されているとする捉え方である。すなわち、古典には時間を超えて普遍的な思想や価値観、ひいては真理が宿っているので、「人生を豊かにする」ために、現代の学習者は「学ぼうと」「謙虚」[*27]な態度で古典に対峙しなければならないというのである。そのため、古典テキストに語られる出来事や教訓的批評から教訓を抜き出させたり、読み聞かせを通じて指針とすべきことを説明したりすることになるのである。他にも、『徒然草』の「日常の教訓」に関する章段（例えば「高名の木登り」）から「日常の教訓」を抜き出し、その理由付けをグループで話し合うことを通じて、学習者に教訓を内面化させる学習活動なども見られる[*28]。そして、古典テキストに書き込まれた「普遍的な思想や価値観」、「真理」などは、「民族の智恵」と、ナショナリスティックな価値を付与されて、書き換えられるのである。

更にここで、松川利広氏が語る過去の体験とそれを振り返った時の感想に注目したい。松川氏は研究目的でイギリスの授業見学に向かう。その際、松川氏が訪問することを踏まえたイギリスの学校は「haiku」の授業を行う。その際、松川氏が抱いた感想が次のように語られている。

私は、この授業という状況の中に身を置くことによって、私自身の「日本（自国）」の伝統的な言語文化である「俳句」についての知識や技能がいかに不十分なものであったかを思い知らされた。加えてイギリス（他国）の子どもや教師に、私自身による創句体験に裏打ちされた実意のこもった「俳句」についての「語り」ができなかったことが悔やまれた。（中略：引用者）「伝統的な言語文化」は、もとより「国際社会」「グローバル化社会」を「生きる」ことを想定して生まれた概念であり、そのためには、まずは我が国（自国）の「伝統的な言語文化」をよく理解し、それを体現していることが大事である。体現者であれば、伝統的な言語文化と自己との関係、および伝統的な言語文化そのものを自分の言葉で語ることができる。[*29]

これは正に、「世界に貢献するものとして自らの国や郷土の伝統や文化についての理解を深め、尊重する態度を身に付け」ることが、国際社会を生きていく上で必要であることが痛感された、という体験である。しかし、ここで述べられていることは、多文化理解に繋がる伝統文化重視ではなく、「教養」としての俳句理解、俳句体験の必要性の実感である。「普遍的な思想や価値観」、「真理」が書き込まれた古典テキスト、という捉え方とは位相が異なるが、古典テキスト理解や伝統文化体験を「教養的知識」と捉える見方がここから見て取ることができるであろう。古典テキストは「普遍的な思想」、「真理」、「教養」、「知恵」が書き込まれたテキストなのである。

ここまで、仰ぐべき対象として古典テキストが捉えられ、学習者に伝えられていくことを確認した。古典テキストは、「美しく」「古典特有」の「響き」や「リズム」をもって表現され、「民族の核心」「日本人の人間性を形成している要因」や「普遍的な思想や価値観」、「真理」が書き込まれた「教養」や「教訓」の書として「先験的に価値」をもつテキストとして捉えられる。そして、これらの言説が、音読や暗唱、朗読を中心に、読解やグループ活動、遊びを取り入れた活動によって、身体化、内面化され、再生産され続けていくのである。

三、関係概念としての古典

本節では、渡辺氏が述べていた戦後古典教育に見られるというもう一つの古典観、「関係概念としての古典」という捉え方に注目したい。繰り返しになるが「関係概念としての古典」とは、「古典の価値は先験的

にあるのではなく、学習者との関係の中に立ち上がり、見いだされるとする」古典観である。ここでは、初等教育・中等教育関係者が古典テキストを読む中で、彼らの中に古典テキストがどう「立ち上が」るのか、またそれと学習者をどう関係させようとしているのか、といったところに注目しながら見ていきたい。

A、表現例としての古典

国語教育誌にあたる中で、目にすることが多かったのは、創作活動に関する実践報告や研究論文である。俳句や短歌の創作は一つ一つ挙げられないほど多く、他にも古典テキスト中の俳句をもとにした連歌創作[*30]、『伊勢物語』中の和歌を用いた歌物語の創作活動[*31]、故事成語などを用いての作文活動などが確認できた。これらは、新学習指導要領の小学校第3学年及び第四学年「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」中の「易しい文語調の短歌や俳句について、（後略：引用者）」と短歌や俳句を用いることが指定されていること、加えて第5学年及び第6学年「B　書くこと」中の言語活動の例示の中で「詩や短歌、俳句をつくったり、（後略：引用者）」と短歌や俳句の創作が求められていること、中学校第三学年「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」中の「古典の一節を引用するなどして、古典に関する簡単な文章を書くこと」が前提となっていることは明らかであろう。更にはこれらの実践報告や研究論文が、「古人につながるという点で、意義があると思われる」[*32]、「「古典の世界の人物と現代の私たち」が無関係ではないということを学びの中で確認できた」[*33]と、古典世界が現代の学習者に遠い存在ではないことを実感させる点に重点を置いていることも指摘すべきであろう[*34]。

また、これらの活動とは異なった古典テキストを用いた創作活動も見られた。例えば、柴田昌平氏の実践報告[*35]では、『『留侯論』（引用者注：蘇軾の「留侯論」）に則って『私の〇〇論を書こう！』」という活動が採り入れられている。その具体は、「留侯論」の構成（①テーマ提示、②具体的な人物名の提示、③前段への反論・異論、④前段の具体例、⑤人物のテーマに関する優れた業績の提示、⑥結論）に則って、人物論を書くというものである。他にも、「漢文のレトリックを手がかりにした読解指導と作文指導との関連指導」を目的に、「中国・日本において、長く名文として位置づけられ、作文の手本とされてきた唐宋八大家の「古文」に着目し、その表現上の特色や構成を模倣して作文に生かした実践報告[*36]や、「対句」や「連文」という漢文に見られる特色を学び、評論文の読解にも生かせるようにするという実践報告[*37]も見られる[*38]。

以上のように、創作活動が採り入れられている古典学習は国語教育誌の中に多く見られる。それが新学習指導要領の求めている古典学習の一つであることは既に指摘したが、このことについて難波博孝氏は次のように述べている。

> 小学校・中学校の「伝統的な言語文化」の指導事項には、発表・音読・作文、また解説にも創作・上演など「つくる／生み出す」内容が多いことに気づきます。まさに表現に向かう「伝統」が目指されているのです。（傍線、本文ママ）[*39]

新学習指導要領における伝統文化に関する学習は「表現に向かう」ことが求められているというのである。ここまで述べてきたことや難波氏の発言を勘案すれば、古典世界を身近に感じることを第一に、時には古典世界の特異性を感じながら、古典テキストに倣って創作活動を行うことを通じて伝統文化を継承する態度を養いながら、他の国語科学習に役立つ力を養うことを目的に、古典学習がなされようとしているのである。或いはここに、俵万智らによる現代短歌に顕著に見られるような伝統文化の創造の契機を設けようとしていることも読み取れようか。

しかし、ここで確認した学習活動では、短歌や俳句の形式、歌物語や漢文という形式を模倣しながら、自らの体験や経験を語るというもので、古典テキストは読まれていない。勿論、読むために書くということが考えられていないわけではないが、出来事の並べ方や修辞技法という点を中心に目が向けられている。その際、古典テキストが向き合っている問題領域やそれに対する向き合い方や応答、逡巡の有り様などは一切読まれないのである。つまり、ここでは古典テキストを、修辞技法や構成、出来事や内容の具体的な書き方の参考にしたり、またそれらを教養として習得するためのテキストとして捉える見方が看取できるのである。

B、身近な古典

従来の古典教育が批判される中で必ず指摘されるのが、古典を原文のまま読むことが重視されてきたこと、また、それに付随する文法中心の学習や現代語訳の練習の繰り返しである。例えば、鳴島甫氏は次のように述べる。

「原文を読む能力をつける」という目標は、それを必要とする文学研究や国語教師や日本史研究を志す生徒並びに自分でも原文で古典を読んでみたいと思う生徒向けの選択科目に回せばよい。それよりも、古典を学ぶ意義を見いだせない生徒が七割を超える現在、古典作品を読むことによって何を学ぶのか、つまり、学ぶ価値がどこにあるのかを明確に示しておくことの方がより重要である。そのためにも、教材として取り上げた箇所の古典的価値を明確にする解説が重要となる。[*40]

ここで述べられている「原文を読む能力」こそ、古典文法の習得、現代語訳に関する手法のことである。更に、「古典的価値を明確にする解説」を交えるなど、原文を読むことに拘らない古典の授業を提案する。鳴島氏の他にも、新学習指導要領の求める「古典に親しむ」ためのポイントをまとめる中で、「昔の人のものの見方や考え方を知るためにはできるだけ多くの文章に触れた方がよい場合がある」とし、「すべてを原文で読む必要はなく、関連する部分は現代語訳で読むような方法を採り入れることが重要」[*41]との提言も見られる。新学習指導要領においても、「古典の原文に加え、古典の現代語訳、古典について解説した文章などを取り上げること」が注記されており、原文に拘ることで「古典嫌い」を誘発することを避けようとする動きが見られるのである。

そこで強調されるのが、現代の学習者に身近なテキストとしての古典である。

竹取物語は、宇宙や不思議な存在を扱ったＳＦファンタジーの要素や、さまざまな人間模様など、中学生に古典のおもしろさを提供する材料が豊富な作品である。[*42]

同じ段（引用者注：『徒然草』第百三十七段）の中で、これまでは「月」や「花」など自然について語っていたものが、ここに来て（引用者注：「男女の情も、ひとへに～色好むとは言はめ」の部分を指す）作者の恋愛論に発展している部分である。このような内容ならば、現代の高校生も興味を持って読むことができるのではないか。（中略：引用者）また、題材を「恋愛観」や「女性観」と考えたのは、時代を超えての人間の大きな関心事である主題を使い、共感を持って古典を読ませる目的があったためである。[*43]

ここで確認したいのは、古典は「おもしろい」「興味を惹く」内容が書かれたテキストであって、決して難しい教義が難しく書かれているテキストではないということで学習者に近さを感じさせようとしている点、そして二つ目の引用に見られるように、古人も現代人と同様の問題につ

いて考え、その有り様が古典テキストに書き込まれているという点で学習者と遠い存在でないことを実感させようとしている点である。前者は『源氏物語』のゴシップ性[*44]や芭蕉忍者説[*45]を用いた実践からも窺え、後者の点は、「昔も今も同じだ」というような理解や共感を通して物事の普遍性を意識させる」[*46]や「現代の人間にも共通するものがあることを発見し、古典への認識を新たにします」[*47]などの発言にも見て取ることができる。

古典テキストには難しい教義ばかりではなく、学習者が「可笑しい」と感じるような要素が含まれている。また、難しく見える内容も実は取り扱っている問題やそれについての応答は学習者のそれと同様で、その様子が古典テキストに書き込まれている。古典テキストは如上のテキストとして捉えられるのである。それだけでなく、「現代の学習者に身近な古典」という言説は、学習者にも提供され、受容され、再生産され続けていく。宮本由里子氏の実践報告中に、一人の学習者の「昔も今も人々の思いは変わらず、歴史の大きさ、雄大さを感じました」[*48]という感想が見え、その過程をよく教えてくれる。

C、〈他者〉としての古典

前項では「現代の学習者に身近な古典」という古典テキストの捉え方を確認したが、それと対照的な古典テキストの捉え方が窺える。

古文は現代（語）と離れているところに、学習の意義がある。なぜなら、古文の適度の言語的な抵抗が言葉とゆっくり向き合うことを可能にして、作品の表現や内容を異化することを容易にさせてくれると考えるからである。さらにそれを通して「自己」や「今」を対象化し、改めて理解することが可能になるからである。[*49]

古典の魅力とは何といっても、現代とは異なる世界を追体験できるところにある。（中略：引用者）まず、古典のなかに、現代とは異なる言語・文化・信仰などの「他者性」が発見されなければならない。そして、発見した「他者性」を理解し「他者」を受容しようとする過程においてはじめて、学習者は自己を相対化し、新しい「ものの見方・感じ方・考え方」を獲得することができるのである。[*50]

ここで強調されるのは、現代と「異なる」、「離れる」点である。この点において、古典世界の「共感」や「共通する」点を強調する前項の古典テキストの捉え方と対照的である。そして、このような古典テキストの捉え方のもとで行われる古典学習の目指されるところは、学習者の見方や考え方、現代の「対象化」、「相対化」である。つまり、「他者性」を持つ古典テキストを読むことを通じて、近代的価値観や学習者の価値観を揺るがせつつ、新たな言説創造の契機を仕組むことが目的とされているのである。故に、古典テキストは、登場人物やテキストの書き手の認識面を中心に、「ゆっくりと向き合」いながら、読まれることになる。その内実については後述したい。

四、教室で創られる〈古典〉への違和

以上、ここまで国語教育誌に見られる古典テキストの捉え方を確認してきた。本節では、これらの古典テキストの捉え方に対する違和を表明する発言を同じく国語教育誌の中で確認しながら稿者自身の違和感を記していきたい。

A、ナショナリズムへの危惧

「音読・暗唱・朗読」を中心に、古典テキストの「美しい」響きやリ

ズム、「古典特有のリズム」が身体化、内面化されようとしていることが見られたが、これに対して疑義が呈されている。例えば、鶴田清司氏は「確かに、下手をすると、国家が「美しい」とお墨付きを与えた文章を聖典化し、それを「名文」として音読・暗唱させ、「暗黙知」として学習者に刷り込んでいくという発想につながりかねない。」[*51]と、「美しい」「名文」として古典を「聖典化」すること、そしてその「刷り込」みに転化しかねないと危機感を伝える。また、難波氏も、「音読や暗唱だけでは、伝統的な言語文化に近づいたとは言えません。」と音読や暗唱だけでは伝統的な言語文化やその一部である古典を理解するには不十分であるとした上で、「音読や暗唱一辺倒の伝統的な言語文化の授業は、伝統への過剰な一体化や過剰な過去への賛美の問題が起こります。」（傍線、本文ママ）[*52]と警鐘を鳴らす。

これは大袈裟な見方のようにも思われるがそうとも言い切れない面がある。例えば有働玲子氏は、坪井秀人氏の『声の祝祭―日本近代詩と戦争』（名古屋大学出版会、一九九七年）を参考にしながら「戦中に行われていた戦意高揚を目指す国民詩朗読や国民学校で励行されていた素読教育等とは異質の古典に親しむ指導を行うことが重要である」[*53]と指摘している。また、「文部省編輯局が執筆した」「明治十六年に発行され」、「小学初等科で児童に作法を教える際の、教師用の指導資料のようなものである」『小学作法書』を用いた音読中心の実践が報告されている[*54]。そこで報告されている小学校中学年の学習者の感想に「今は、お父さんやお母さんに、朝と夜お辞儀はしていないけど、やってみようかな」、「ぼくのお兄ちゃんはいつも僕を困らせるから、これを読ませてあげたい」[*55]と、テキストに感化されながらテキスト中に語られる価値観をそのまま受容する様子やテキストを「正しい」価値観が語られた学ぶべき教養書の類として捉える様子が窺えるのである。ここに戦中に見られたテキスト、教師、学習者の三者の関係の有り様を想起しても不自然ではないだろう。他にも昔話や神話を教えられることになる小学校低学年に『古事記』「天地の初め」部分を「リズムがあり、覚えやすい」との理由で暗唱指導が行われた実践報告も見られる[*56]。

そして少し気にかかるのが、小学生に興味や関心を抱かせるための教材開発や、音読や暗唱のための教材開発にあたって、戦前や明治期の国定教科書や唱歌に目が向け始められていることである。例えば、次のような発言が見られる。

> 文語調の文章の読みになじませる教材を戦前戦時に遡って探すなら、国定国語教科書にその候補を多く見いだすことができよう。『小学校国語読本』（サクラ読本）には文語体の文章（詩歌を除く）が十七箇あり、『初等科国語』（アサヒ読本）には二十箇ほどもある。後者には『平家物語』を読みやすくリライトした教材が七つ入っている。[*57]

> いっそのこと国語科が、特に導入期の古典教材として、唱歌・童謡の歌詞を積極的に採り入れていってはいかがであろうか。（中略：引用者）千年以上の永きにわたり、日本人が季節に対して懐いてきたそういう感覚（引用者注：タンポポを発見して春の訪れを感じるなどの感覚）を、小学生の中に甦らせることができたら、それこそが真に「伝統的言語文化」の「継承・発展」と言えるのではなかろうか。[*58]

文語調に親しむための教材開発を目的とした戦前期戦時期国語教科書や唱歌への注目。戦時期国語教科書は言うまでもなく、唱歌が明治期のナショナリズム運動に加担したことも注意されて良いであろう[*59]。

先述したことの繰り返しになるが、新学習指導要領が「伝統文化の重視」を求めるのは、グローバル化社会に生きる人材の育成をねらっての

ことで、決してナショナリズムを煽ろうとしてのことではない。しかし、ここまで述べてきた動きを見てみると、明治期や戦前戦時期と異なる新たなナショナリズム運動が生まれるのではないかという危惧もされるのである。

B、均質でない日本文化

日本人の日本人たる所以が書き込まれたテキストとしての古典を捉えることに対しても疑義が呈されている。

例えば、大槻和夫氏は、新学習指導要領が「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」を新設したことに対して、「古文・漢文を「伝統的な言語文化」として読ませれば日本人のアイデンティティが形成されるとでもいうのだろうか」[*60]と、古典学習とアイデンティティ形成との繋がりを疑う。これは古典テキストそのもの自体には「民族の核心」や「日本人の人間性を形成している要因」などはないと捉えているように考えることができるだろう。更に難波氏は、日本文化の多様性について次のように述べる。

> 日本には、アイヌ文化・在日コリア文化・沖縄文化が既に土着化し、日本の伝統文化の担い手の一つとなっています。いわゆる和文化だけに注目するのではなく、このような文化にも注目することが、豊かで多様な日本の伝統文化を継承することにつながるのです。（傍線、本文ママ）[*61]

日本文化は、一つの日本民族というものが形成した均質化された文化ではない。古代から現代まで、多種多様な文化が、混合したり、反発したり、共存したり、多様化された文化であることを指摘するのである。

古典文学の研究者や日本史学の研究者が明らかにしてきているように、日本文化は決して一様には語れない。例えば、日本と中国との関係のみで考えるのではなく、琉球王国を含む東アジアの視点で考えることが提案されていたり[*62]、キリシタン文化との出会い[*63]にも目が向けられたりしている。日本国内のことに限っても、寺社の悉皆調査の成果による儀礼書や次第書、表白などの宗教テキストにも注意が向けられていたり[*64]、これまで「偽」であるという点で切り捨てられてきた偽書に注目が向けられ始めていたり[*65]、日本文化の多様性は見直されているのである。決して単一の日本民族が、これまで述べられてきたような「貴族達が形成してきた雅な文化」、「武士が形成してきた剛胆で質素な文化」のように単一の文化を形成してきたとは言えない文化の有り様がありありと伝えられているのである。この点に目をむけず、「日本民族の核心」、「日本民族としての生き方」、「日本民族の智恵」が古典に書き込まれているとしても、それは日本文化や古典を痩せ細ったものとしてしまうだけであろう。更には、「日本人のあるべき姿」「日本人たるものの思考法」などといった名目で、古典テキストに付与されている価値が学習者に刷り込まされてしまうであろう。

C、古典テキストの読み

古典テキストの「他者性」を強調し、古人のものの見方や考え方を読解し、学習者のものの見方や考え方を深化・拡充させることを目的とした古典学習が見られることは既に述べた。例えば、「芥川」として有名な『伊勢物語』第六段を扱った実践では、次のように目的が設定され、古典学習が行われる。

> どの教科書も、やっとの思いで盗み出した女を鬼に喰われてしまった（兄たちに奪い返されてしまった）男の悲恋の物語として、歌の鑑賞を中心に、登場人物の心情・素性を読み取らせる方向で手引きが構成されており、鬼が一口で女を食う描写などは「絵空事」とし

てあまり重要視されていない。ところがこの「絵空事」こそが当時の人々の世界観、文化・信仰のうえでの「他者性」なのであり、学習者の知的好奇心をかきたて、古典に親しむ態度を育てるテコとなるものである。（中略：引用者）当時の人々が、心の「闇」とどのように向き合ってきたのかということについて学ぶことは、ストレスや犯罪の多い現代を生きる学習者にとって現実味のあるテーマであるといえる。[*66]

第六段終盤に見える鬼一口で女を喰らう場面に重きをおき、ここにこそ文化・信仰の面での「他者性」が色濃く表れ出ているとして、学習者の認識の深化・拡充を目指そうとするのである。つまり、ここで強調されるのは、現代人との異なる文化や信仰、風俗の面での「他者性」、換言すれば、テキストに書き込まれた内容面での「他者性」なのである。そこでは諸テキストに書き込まれた結婚の形態や家族構成、往生の様子なども取り上げられることになるのであろう。

確かに古典テキストに書き込まれた文化や信仰、風俗などに注目し、それらの背景にある考え方を学ぶことによって学習者の自然や社会、人間に対する見方や考え方が広げられる面もあるであろう。しかし、それはあくまで文化や信仰、風俗が教養や知識として獲得されるだけである。その証拠に、高橋氏が報告している学習者の感想文を見てみると、「昔の人々は想像力が豊かな上に賢かったのだと思える」、「闇から鬼を連想するなんて私には出来ないし、すごいと関心するばかりだった」、「鬼という得体の知れない悪役が出てきて、悪いところを全部もっていってしまう所に、今とは違ったおもしろさを感じた」など、自分とはかけ離れた昔の人の話としてしか「芥川」を受容できていないのである。これらのことから分かるように、テキストに記された出来事を読むことが目指されているのであって、テキストが扱っている問題領域、書き手の対話過程やその応答、テキストが帯びるイデオロギー性などと向き合わせ、対話をさせ、学習者の認識の深化・拡充が目指されているわけではないのである。

他にも「芥川」が扱われた実践報告がある。[*67] この実践では、「芥川」を他の古典テキスト（『伊勢物語』「通ひ路の関守」段、選択教材として『今昔物語集』「在原業平中将女、被噉鬼語」、『更級日記』「竹柴寺」、『西鶴諸国ばなし』「忍び扇の長歌」。『雨月物語』「吉備津の釜」）と読み比べ、「芥川」の特徴をあぶりだすことが学習活動として仕組まれている。同様のモティーフを扱ったテキストを読み比べ、中心に据えたテキストの特徴を捉えるという活動である。この活動を経た学習者の感想について次のように記されている。

生徒達は、「時代を超えても、作品の根底にあるのは『人を愛する気持ち』、それが様々に姿形を変え、違った作品になっているのはおもしろいと感じました。」「（古典作品を）見くらべることで、自分たちの考えも広がるのがとてもよくわかりました」などと記していた。[*68]

この感想を踏まえると、学習者は読み比べの活動を通じて、「芥川」を「人を愛する気持ち」を伝える話として読み、「自分たちの考えも広がる」と実感したようである。一見すると、学習者は話の筋を追い、主題のように見える〈愛〉について読解し、ものの見方や考え方を深めているように見える。しかし、「芥川」に用いられている女性掠奪のモティーフ[*69]は看過できない問題である。読み比べられた古典テキストも女性掠奪のモティーフが用いられているという点で、「芥川」と共通している。つまり、学習者は男性に都合の良い女性掠奪の話型を用いたテキストを無批判に複数読まされているのである。そして、授業の中では女性掠奪のモティーフはどうやら「「をとこ」の努力」[*70]として読まれていたよう

である。このことに注意を向けず、学習者が「自分たちの考えも広がる」と実感したと記していることを「認識を深化・拡充させていた」[*71]とすることに危機感を抱くのは稿者だけであろうか。

この実践でも問題になるのは、テキストが扱っている問題領域、書き手の対話過程やその応答、テキストが帯びるイデオロギー性などと向き合わせることなく、出来事などの表層的な読解に終始してしまっていることである。女性掠奪のモティーフを用いながら、テキストの書き手はどのようなことを問題領域としながら、それに対してどのように応答しているのか。ここに目が向けられることで、前述した問題はクリアされるように思われる。

ここでは、「芥川」を扱った二つの実践を取り上げることで古典テキストが読まれていないことを問題として挙げた。このような実感は稿者に限ったものではない。例えば、竹村氏は次のように述べる。

教材選択の不適合、学習指導内容の表層性。これをまとめれば、教材、学習指導ともに、生徒のかかえもつ現実感覚や知的欲求にとどいていない古典の教室ということになります。（中略：引用者）わずらわしい文法や待遇表現、語彙の学習、あるいはワークシート作業や現代語訳、内容整理といった学習活動をへてみえてくる世界を、生徒たちの現在に知的刺激をあたえる世界として開示しえていない古典教室。古文の世界への違和感や「古文の学習」そのものへの拒絶、抵抗はこれに由来する、というのが私の見方です。[*72]

高等学校で行われたアンケートや近代文学研究者磯貝英夫氏の古典学習の振り返りを参考にしながら、学習作業に見合わない学習指導内容が原因で、学習者にとって古典学習が「拒絶、抵抗」の対象となってしまっていると竹村氏は述べる。つまり、古典テキストが読まれないことには学習者の「知的欲求」が満たされる古典学習は果たされないのである。それは現代文学習をめぐる実践報告や研究論文と比較すれば実感されるであろう。言語抵抗があるにせよ、現代文学習で要求している読みの位相と古典学習で要求する読みの位相は大きく異なる。言語抵抗があるにせよ、現代文と同等の読みを求め、学習者の「知的欲求」を満たす必要があろう。それは学習者のみに求められるのではなく、初等教育・中等教育関係者全員にも求められることである。

D、変わらない教材観

最後に、国語教育誌中に見られた教材観について一言したい。論稿や実践報告を見ていると、『宇治拾遺物語』（以下、『宇治拾遺』）などの特定のテキストやジャンルについて述べられることがあった。その内、説話や『宇治拾遺』について述べられたものを見つけることができたので、幾つか挙げてみたい。

説話とは、人の口から人の口へと受け継がれる世の中の珍しい話のことです。大きく仏教的な教えを説くものと、社会を題材にした教訓的なものがあります。[*73]

『宇治拾遺物語』は、真面目な者や正直な者が幸せになったり、約束を守る大切さを教えたりする内容が、生徒が生きる知恵を学ぶのに適した古典である。[*74]

（引用者注：『宇治拾遺物語』第十三話は）情趣を解さない児に関する笑話として扱われることが多い。基本的にはそのとおりなのだが、この話には平安朝的な美意識の転換が見られる。末尾に「うたてしやな」と記した人間は、桜のことよりも作物のことを心配する人間の出現に驚いているのである。[*75]

一つ目の引用は説話というジャンルに対する見方で、説話を口承文芸として捉えていることが明らかである。しかし、例えば『今昔物語集』は諸資料を用いて、一つの説話を構成していることが明らかであるし、[*76]『宇治拾遺』はそのような性格をもつ『今昔』との強い関係が指摘されるテキストであること[*77]は周知の事実である。つまり、古典文学研究の分野では、説話は口承文芸であるとの見方は既に三十年以上も前に破棄されているのである。

二つ目は『宇治拾遺』という特定のテキストに対する見方で、説話集を教訓書の類とする見方である。確かに説話には話末評が付記され、そこには教訓の類が書き込まれることがままある。しかし、これまた古典文学研究の分野においては、『宇治拾遺』の話末評は、語られる出来事との齟齬をきたしていたり、話末評自体をもどいていたりしており、既に話末評としての機能を果たしていないことが指摘されている。[*78]このことが等閑視され、説話に付された話末評を以て説話集を教訓書とする見方が未だにはびこっているのである。むしろ、『宇治拾遺』はそうした規範的な言説をもどくテキストなのである。[*79]

三つ目は『宇治拾遺』中の特定の章段に対しての見方である。目前の桜よりも田舎の麦を心配する児に対して、一緒にいた僧の感想を代弁するかのような話末評として「うたてしやな」がある。ここに「平安朝的な美意識の転換」を見るのだが、前述した通り、『宇治拾遺』の話末評は話末評をもどく側面がある。そしてそれは既に竹村氏によって指摘されている。[*80]『宇治拾遺』というテキストの性格を踏まえずに、「平安朝の美意識の転換」と時代に還元してしまっているのである。

これら三つの引用から分かるように、古典文学研究の分野での成果が踏まえられずに、旧態依然としたジャンル観、教材観のもと、古典学習の視点が与えられたり、古典学習自体が行われようとしているのである。他分野の成果を絶対視するわけではないが、学習者に痩せ細っていない古典テキストを提示したり、知的好奇心を刺激するような“おもしろい”授業が行われるためには、成果を生かし、旧態依然としたジャンル観や教材観を更新することが求められるであろう。

五、おわりに

以上、ここまで初等教育・中等教育関係者は古典をどのようなテキストとして捉え、学習者にどのように古典テキストを差し出そうとしているのかを国語教育誌の中から探り、それに対する違和感を表明した発言や稿者自身の考えを述べてきた。古典文学研究や日本史学研究の成果、また他の古典テキストをめぐる〈知〉が踏まえられずに、旧態依然としたジャンル観、教材観で以て古典テキストと対峙し、古典テキストが読まれずに表面的なところで価値を付与されていること、ここをこそ更新することで古典学習は新たな局面を迎えるに違いない。[*81]

最後に平成17年度実施の「教育課程実施状況調査」の際の生徒質問紙調査結果を踏まえた西辻氏の次の発言に注目したい。

また、生徒質問用紙調査の「古典と現代文の文章を読み比べること」については、「普段の生活や社会生活の中で役に立つと思った」という回答が14・5%にとどまっている。「人前でスピーチや説明をすること」や「人前で報告や発表などをすること」という学習については、ともに半数を超える生徒が役に立つと思ったと回答しているのと対照的な結果となっている。生徒の多くが「普段の生活や社会生活の中で役に立つ」と思っていない古典の学習について、どのように学習の意義を感じさせ、学習の意欲を喚起するか、指導の改善が求められるところである。

ここで述べられているのは古典学習が「普段の生活や社会生活の中で役に立っていない」と学習者が思っていることに対する危惧である。「普段の生活の中で役に立つ」ということが基準になれば、古典テキストや古典学習はますます痩せ細ったものとなり、古典学習は不要との声があがることになるであろう。というのも、古典文学研究やその周辺分野を覆う人文知は大半が「普段の生活の中で役に立つ」ことはないからである。それは、多くの哲学研究者や文学研究者が表明していることである。しかし、人文知が不要であるはずがない。そのことは震災以後の状況を見れば、一目瞭然である。

では、どのような古典学習を目指すべきかと言えば、稿者はまだその答を持っていない。現在の状況を凝視し、人文知を見直し、古典テキストを見直し、古典テキストに関する知を見直し、実践を積み重ねることによって、その手掛かりを掴んでいきたい。

注

1　竹村信治「伝統的な言語文化”の摑み直し（上）―『伊勢物語』初段、「今昔物語集」「馬盗人」などを例に―」（『国語教育研究』第五三号、二〇一二年三月）、55頁。

2　前掲注1竹村論文、55頁。

3　『月刊国語教育』二〇〇八年六月号特集名。

4　『月刊国語教育研究』二〇一〇年八月号特集名。

5　『教育科学国語教育』二〇一一年二月号特集名。

6　調査対象として扱った国語教育誌は以下の通り。
『日本語学』（明治書院）、『文学・語学』（全国大学国語国文学会）、『解釈』（解釈学会）、『国語の授業』（児童言語研究会）、『文芸教育』（文芸教育研究協議会）。これらの雑誌も二〇〇八年以降のものだけを扱った。

7　渡辺春美「古典学習材開発・編成の観点―古典学習材の開発・編成個体史を手がかりに―」（『月刊国語教育研究』第四四〇号、二〇〇八年十二月）、4頁。

8　渡辺春美「古典学習指導の問題点―学ぶ意味への疑問に応えぬ学習指導―」（『教育科学国語教育』第六九六号、二〇〇八年八月）、26頁。

9　佐藤比呂己「古典教育の意義―古文を中心として―」（『解釈』第五四号、二〇〇八年五月）、25頁。

10　河野庸介編『月刊国語教育別冊　明日を拓く国語科重要用語辞典』「古典」項（細川恒氏執筆）。

11　野口芳宏「「伝統的な言語文化」の指導―その「根本、本質、原点」は―」（『教育科学国語教育』第七〇二号、二〇〇九年一月）、121頁。

12　ハルオ・シラネ、鈴木登美編『創造された古典―カノン形成・国民国家・ジェンダー』（新曜社、一九九九年）

13　菊野雅之「「敦盛最期」教材論―忘却される首実検と無視される語り収め―」（『国語科教育』第六五号、二〇〇九年三月）や八木雄一郎氏の古典教育史をめぐる一連の論考。

14　前掲注8渡辺論文の中に、次のように述べられている。
典型としての古典観による学習指導は、戦後、一九八〇年代から、関係概念としての古典観に基づく指導へと転換する傾向にあると考えられる。しかし、現代もなお、前者による強直した指導がなされているところに問題がある。（26頁）

15　大熊徹「楽しく繰り返す音読から暗唱へ」（『教育科学国語教育』第七三三号、二〇一一年二月）、12頁。

16　長谷川みどり「古典の授業は不易である」（『教育科学国語教育』第七三三号、二〇一一年二月）、47頁、50頁。

17　冨家淳夫「古典（韻文・漢詩）の優れた表現やリズムを読み味わう国語学習―文字カードや枝カードを用いた音読や暗唱を通して―」（『月刊国語教育研究』

第四六二号、二〇一〇年十月）、35頁。

18　音読や暗唱教材として多く言及されるのは短歌・俳句や『平家物語』であり、続けて我々に馴染みのあるとされる「七五調のリズム」が添えられることが多いということから明らかである。

19　須田実「言語文化に親しむ古典の授業改善―古典を通して日本人の「心の原点」や「言語の特質」を学び合う―」（『教育科学国語教育』第六九六号、二〇〇八年八月）、103頁。

20　山中恒己「古典教育の再構築に向けて―古典学習の系統化と教材の見直し・精選を―」（『月刊国語教育研究』第四六五号、二〇一一年一月）、37頁。

21　塩苅有紀「「日本神話かるた」と「読み聞かせ」で日本神話を語り継ぐ―小学校二年　日本神話「くにうみ」」（『教育科学国語教育』第七二三号、二〇一〇年六月）、32頁。

22　前掲注21塩苅論文には「国際社会において、自分の国に対する誇りと、固有の文化への理解のない者は決して尊敬されない」（33頁）とある。

23　冨山敦司「伝統的な言語文化への憧れを引き出す試み―生徒の実態から出発する漢文指導―」（『月刊国語教育研究』第四七四号、二〇一一年十月）、29頁。

24　蔭山江梨子「中学・高校における古典指導の開発」（『教育科学国語教育』第七〇八号、二〇〇九年五月）、103頁。

25　市毛勝雄「文法抜きの音読指導を」（『教育科学国語教育』第六九六号、二〇〇八年八月）、15頁。

26　森川敦子「意図的、計画的に、昔話や神話の読み聞かせを行う必要性と目的」（『教育科学国語教育』第七一七号、二〇一〇年一月）、35頁。

27　岩崎淳「古典は人生を豊かにする―なぜ古典を学ぶのか―」（『教育科学国語教育』第七三三号、二〇一一年二月）、18頁、19頁。

28　坂口智子「古典の世界を楽しもう―『徒然草』の実践を通して―」（『月刊国語教育研究』第四六〇号、二〇一〇年八月）、44頁、45頁。

29　松川利広「「伝統的な言語文化」の学習指導にグローバルな視点を」（『月刊国語教育研究』第四七四号、二〇一一年十月）、2頁～3頁。

30　黒岩淳「俳諧連歌を理解させる「奥の細道」―芭蕉の発句をもとに「表八句」創作」（『月刊国語教育』、二〇〇九年四月）

31　澤田浩文「古典世界との共通点を探る―自作歌物語と『伊勢物語』の比較を通して―」（『月刊国語教育研究』第四六六号、二〇一一年二月）

32　前掲注30黒岩論文、27頁。

33　前掲注31澤田論文、45頁。

34　一方で、『枕草子』「春はあけぼの」段を扱った実践報告に、「私の枕草子を作ろう」などの四季の景物を「〇〇は■■」形式で書く活動が多く見られるが、そこでは、清少納言のものの見方の特異性を際立てることに重きが置かれていることも見逃せない。

35　柴田昌平「「古典」で学ぶ、論じる楽しさ」（『月刊国語教育』、二〇〇八年五月）

36　加藤和江「漢文の表現上の特色を現代の作文に生かす関連指導」（『月刊国語教育研究』第四二九号、二〇〇八年一月）、54頁。

37　釜田啓市「多言語を意識した漢文授業の試み―現代文・古文・英語との関連性を求めて―」（『月刊国語教育研究』第四三〇号、二〇〇八年二月）、53～56頁。

38　管見の範囲では、漢文の学習指導においてしか見られなかった。模範文例集としての漢文という見方がなされているということが指摘できようか。

39　難波博孝「伝統は古くないから、こそ」（『教育科学国語教育』第七三三号、二〇一一年二月）、14頁。

40　鳴島甫「読書へとつなぐ伝統的な言語文化の指導」（『月刊国語教育研究』第四三七号、二〇〇八年九月）、31頁。

41　冨山哲也「古典に一層親しませるために」（『日本語学』第三七七号、二〇一一年四月）、10頁。

42　渡辺真由美「「竹取物語」の魅力にせまる」（『月刊国語教育』、二〇一〇年十月）、33頁。

43　西岡裕二「「徒然草」を使った学習―兼好法師も男だね！」（『月刊国語教育』、二〇一〇年十月）、43頁。

44　長崎和彦「女房たちのうわさ話―源氏物語「光源氏の誕生」」（『月刊国語教育』、二〇〇九年五月）

45　深谷仁「単元『おくの細道』～芭蕉忍者説を追う～」―学習意欲の向上を目指して―」（『月刊国語教育研究』第四五九号、二〇一〇年七月）

46　松澤直子「「古典に親しむ素地」をつくる―国語総合『伊勢物語』における実践―」（『月刊国語教育研究』第四四〇号、二〇〇八年十二月）、61頁。

47　大和田満里子「『徒然草』を四コマ漫画に」（『国語の授業』第二一八号、二〇一〇年六月）、71頁。

48　宮本由里子「古典を楽しむ―テーマで読む二つの古典―」（『月刊国語教育研究』第四五一号、二〇〇九年十一月）、6頁。

49　堀田悟史「高等学校における「伝統的な言語文化の教材開発」について―「古文の理解」から「古文との対話」へ導く教材開発の観点―」（『月刊国語教育研究』第四五九号、二〇一二年二月）、24頁。

50　高橋史樹「学習者の「ものの見方・感じ方・考え方」を再構築するための古典の授業―『伊勢物語』第六段「芥川」を学習材として」（『月刊国語教育研究』第四七一号、二〇一一年七月）、58頁。

51　鶴田清司「古典学習における暗記・音読・暗唱を超えて」（『教育科学国語教育』第七〇六号、二〇〇九年五月）、33頁。

52　前掲注39難波論文、16頁。

53　有働玲子「古典の音読・朗読指導―声を聞き合う学習を作る―」（『月刊国語教育研究』第四八八号、二〇一二年十二月）、30頁。

54　山中伸之「実用的な内容の文章を読む」（『教育科学国語教育』第六九六号、二〇〇八年八月）、48頁。

55　前掲注54山中論文、50頁。

56　松崎力「『古事記』で古代へ思いを馳せる」（『教育科学国語教育』第七三三号、二〇一一年二月）

57　小田迪夫「伝統的な言語文化の学習を深める旧教材をふりかえる」（『月刊国語教育研究』第四五七号、二〇一〇年五月）、37頁。

58　藤本宗利「古典教材としての唱歌―歌詞の中の「伝統的言語文化」」（『月刊国語教育』、二〇一〇年五月）、83頁、85頁。

59　山東功『唱歌と国語―明治近代化の装置―』（講談社、二〇〇八年）

60　大槻和夫「新学習指導要領はどのような国語科教育実践を求めているのか―中学校の場合―」（『教育科学国語教育　臨時増刊』第六九四号、二〇〇八年六月）、59頁。

61　前掲注39難波論文、16頁。

62　例えば小峯和明編『東アジアの今昔物語集』（勉誠出版、二〇一二年）。

63　例えば、『アジア遊学　第一二七号』（勉誠出版、二〇〇九年十一月）は「キリシタン文化と日欧交流」の特集を組んでいる。

64　その成果として阿部泰郎『中世日本の宗教テクスト体系』（名古屋大学出版会、二〇一三年）が挙げられる。

65　例えば、錦仁他編『「偽書」の生成』（森話社、二〇〇三年）。

66　前掲注50、高橋論文、58頁、61頁。

67　鎌田政司「「古典B」における古文指導の工夫―「学習の手引」の活用を通して―」（『月刊国語教育研究』第四八八号、二〇一二年二月）

68　前掲注67、鎌田論文、28頁。

69　立石和弘『男が女を盗む話―紫の上は「幸せ」だったのか』（中公新書、二〇〇八年）

70　前掲注67、鎌田論文、27頁。

71 前掲注67、鎌田論文、28頁。

72 竹村信治『言述論―for説話集論―』（笠間書院、二〇〇三年）、570頁。

73 藤原かおり「「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の指導―音読で伝統的な言語文化の特性を体験する授業を」（『教育科学国語教育臨時増刊』第七二九号、二〇一〇年十月）、103頁。

74 深谷幸恵「読み聞かせと音読を組み合わせる」（『教育科学国語教育』第六九六号、二〇〇八年八月）、53頁。

75 岩崎淳「学習指導要領の改訂と古典指導の方向」（『月刊国語教育』、二〇〇八年六月）、57頁。

76 小峯和明『今昔物語集の形成と構造』（笠間書院、一九八五年）

77 小峯和明「今昔・宇治成立論の現在―宇治大納言物語の幻影など―」（『国文学』第二九巻九号、一九八四年七月）

78 森正人「宇治拾遺物語の本文と読書行為」（有精堂編集部編『日本の文学第五集』所収、有精堂、一九八九年五月）

79 小峯和明『宇治拾遺物語の表現時空』（若草書房、一九九九年）

80 前掲注72、竹村氏著書。

81 勿論、今回見た中にも諸分野の成果を生かした論稿や実践報告も見られた。例えば、田山淳子「『徒然草』の序段を学習課題にする」（『月刊国語教育研究』第四四〇号、二〇〇八年十二月）は「あやしうこそものぐるほしけれ」の解釈をめぐって、学習者に『徒然草』の幾つかの章段を読ませ、学習者にその解釈を問う。また、中村雅芳「作者の息づかいを実感させる授業」（『日本語学』第三七七号、二〇一一年四月）は『枕草子』の学習に三巻本や能因本を用いて比べ読みをするという学習活動を提案する。しかし、これらのような実践報告は圧倒的に数が少ない。

（神戸龍谷中学校高等学校講師）